

加藤茂弘 研究員

南海トラフ巨大地震の発生が危惧される昨今、「天災は忘れた頃にやってくる」の言葉通り、近畿地方内陸の活断層で発生する大地震にも気を配らないといけません。

兵庫県とその周辺地域には長大な活断層帯が多く分布し、そのいくつかは歴史時代に大地震を起こしてきました。有馬―高槻断層帯や六甲・淡路島断層帯は1596年伏見地震（秀吉の地震）や1995年兵庫県南部地震（阪神・淡路大震災）を起こし、京阪神の大都市に大被害



をもたらしました。山崎断層帯西部は868年播磨地震を、県北近くの郷村断層と山田断層帯の一部は1927年北丹後地震を、それぞれ起こしました。

兵庫県南部地震後に行われた活断層のトレンチ調査では、断層運動による地層のずれが発掘され、過去の大地震の履歴が明らかにされました。これらの調査から、県とその周辺の活断層帯が大地震を起こす活動間隔は約2千〜5千年と考えられています。したがって、歴史時代に大地震を起こした活断層帯は近

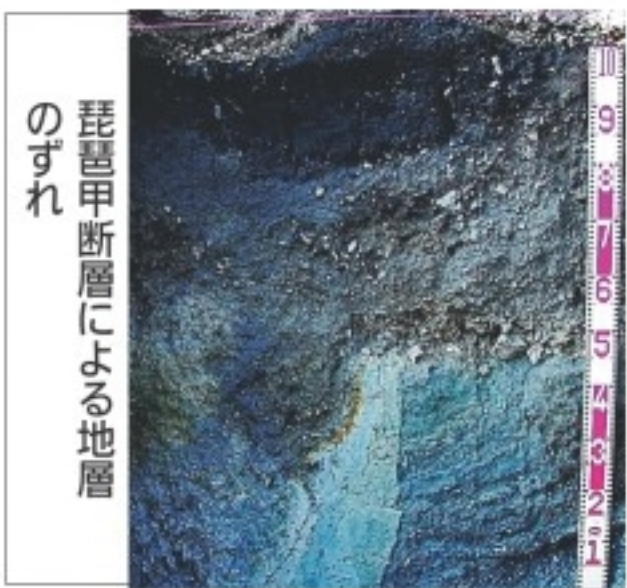


兵庫県とその周辺に分布する主な活断層帯

未来にマグニチュード7を超える大地震を起こす可能性が相対的に低いと考えられます。

一方、最新の活動時期が2千年以上にさかのぼる活断層帯も明らかになっています。山崎断層帯東部の琵琶甲断層は約2千年前に、淡路島南の海底を走る中央構造線断層帯は約3千年から5500年前に、それぞれ大地震を起こしたと推定されました。活動間隔を考えると、こ

れら二つの活断層帯には特に注意が必要です。



琵琶甲断層による地層のずれ



トレンチ調査で発掘された野島断層による地層のずれ

2021年末から京都府南部で、マグニチュード3〜4.5の中小規模の地震が頻発しています。この付近には三峠・京都西山断層帯があります。地震活動の活発化はこの活断層帯で大地震が発生する前兆であるという考え方が一方、活発化した活断層帯ではなく別の活断層帯での発生を示唆しているという見方もあります。

いずれにせよ地震活動の活発化は大地震への警鐘と考えて、日頃の地震への備えを確認したいものです。

ひとはく
研究員
だより

活断層

地層のずれは大地震の履歴